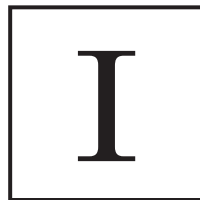


こどもの発疹の みかた—総論



日常の診療で小児の感染症をみる機会が多いが、小児の感染症のうちでも、特に急性発疹症と分類される疾患群は、発疹形態はもちろん病態もよく似ている場合が少なくない。鑑別に手を焼くことがしばしばである。

小児に好発する急性発疹症，すなわち比較的急激に発症し，発熱などの全身症状とともに全身に発疹を生じる感染症には表 1-1 にあげたような疾患

表 1-1 小児に好発する急性発疹症

A. ウイルスが原因である発疹症	B. その他の原因による疾患
1. 古典的なウイルス感染症 麻疹 風疹 水痘・带状疱疹 単純ヘルペス 伝染性紅斑 突発性発疹	1. 細菌感染症 溶血性連鎖球菌感染症(猩紅熱) ブドウ球菌感染症・SSSS
2. 比較的新しいウイルス感染症 手足口病 伝染性単核症 Gianotti 病と Gianotti-Crosti 症候群 エコーウイルス感染症 その他のウイルス感染症	2. その他の感染症 マイコプラズマ感染症 リケッチア感染症 スピロヘータ感染症 その他
	3. 川崎病
	4. 薬疹
	5. 全身疾患のデルマドローム 悪性リンパ腫・白血病などの特異疹・非特異疹

2 I. こどもの発疹のみかた

がある。

皮膚症状は多彩で、しかもこれらは、決定的ではないが、概ね紅斑・丘疹を主とする群、水疱を生じる群、蕁麻疹様発疹を生じる群、多形紅斑を生じやすい群、などに分けられる（表 1-2）。疾患原因はウイルスを原因とする

表 1-2 主な急性発疹症

A. 紅斑・丘疹が出現する疾患

麻疹

風疹

伝染性紅斑(網状紅斑も呈する)

突発性発疹 (HHV-6, 7)

伝染性単核症 (EBV, CMV)

CMV 感染症

エコーウイルス (2, 4, 6, 9, 11, 16, 18) 感染症

Cox A (4, 5, 6, 9, 16) 感染症

B (3, 5) 感染症

Gianotti 病 (HBV)

Gianotti-Crosti 症候群(EBV, CMV 他)

B. 水疱を生じる疾患

単純ヘルペス・Kaposi 水痘様発疹症

水痘・帯状疱疹

手足口病: Cox A 6, A 9, A 10, A 16, Entero 71

C. 蕁麻疹を生じる疾患

肝炎 A, B, C

Cox A 9

D. 多形滲出性紅斑を生じる疾患

単純ヘルペスによる EEM minor

マイコプラズマ・薬剤・デルマドローム等による EEM major

E. その他

結節を形成する疾患

伝染性軟属腫

HPV による病変: 疣贅

HIV

疾患が多いが、細菌、マイコプラズマ、リケッチアなども病因としてあげられる。

A. 皮膚病変の特徴

1. 主に紅斑・丘疹が出現する疾患

紅斑・丘疹型の皮膚病変を生じる急性発疹症としてあげられる疾患にはウイルス感染症の麻疹・風疹・伝染性紅斑・伝染性単核症・エコーウイルス感染症などがある。

a. 麻疹 measles

麻疹の詳細な病態は別項(26頁)に述べられているが、粘膜・皮膚病変は、発熱・全身倦怠感など前駆期が3～4日続き、一旦少々解熱し、再び高熱とともに発疹期へ移行する頃にみられる Koplik 斑に始まる。Koplik 斑は口内粘膜の白色小丘疹で、麻疹に特異的である。一方、皮膚病変は発疹期に出現する示指頭大ほどの浮腫性紅斑で、顔面から始まり、急激に体幹、四肢へ拡大していく。融合傾向が強く、最終的には全身に及ぶが、回復期になって炎症が終焉すると、色素沈着を残して消退していく。ときに落屑を伴うこともある(図1-1～7)。

b. 風疹 rubella

2～3週間の潜伏期で、前駆症状はほとんどなく、軽度の発熱とともに発疹が出現し、急激に全身に拡大する。粟粒大の紅色小丘疹で、3～4日で色素沈着を残さず消失する。発疹と同時期に軟口蓋にForscheimer's spotsが出現したり、リンパ節の腫脹は高率にみられる。風疹は、麻疹と比べ、全身症状も軽く、全経過4～5日で軽快する(図1-8, 9)。妊婦の罹患によって生じる先天性風疹症候群が問題である。

c. 突発性発疹 exanthema subitum

Human herpes virus-6, -7による感染症で、初感染を突発性発疹という。

4 I. こどもの発疹のみかた



図 1-1 乳児麻疹
(9 カ月男児)
顔面・体幹に丘疹・紅
斑がみられる。



図 1-2 小児麻疹
(4 歳女児)
カタル症状が強い。



図 1-3 小児麻疹
(4 歳男児)
紅色丘疹・紅斑が播種
状にみられる。



図 1-4 成人麻疹 (42 歳女性)
体幹の爪甲大までの浮腫。



図 1-5 図 1-4 の拡大

39℃前後の高熱が数日続き、解熱とともに風疹ないし麻疹様の発疹が全身に出現する。発疹は数日で色素沈着を残さず、消失する。高熱期に口内粘膜に永山斑、大泉門の膨隆、痙攣発作、易刺激性などを生じることがあるが、概ね予後は良好である。



図 1-6 頬粘膜の Koplik 斑



図 1-7 下口唇粘膜と歯肉の Koplik 斑



図 1-8 風疹 (成人例, 45 歳女性)
粟粒大の紅色小丘疹が播種状にみられる。

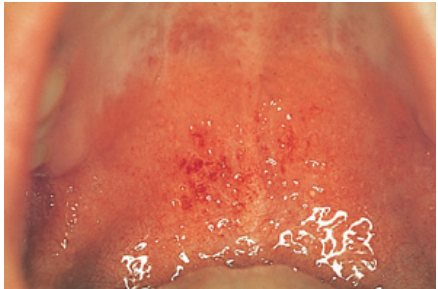


図 1-9 Forscheimer's spots

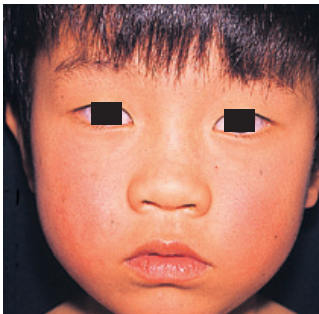


図 1-10 伝染性紅斑
(7 歳男児)
顔面の蝶型紅斑



図 1-11 伝染性紅斑
(図 1-10 と同一例)
前腕のレース模様状
の紅斑



図 1-12 伝染性紅斑
(16 歳女性)
上腕の網状紅斑

本邦では生後2年間くらいまでに罹患して、抗体を保有する。ウイルスはその後、潜伏しているが、特定の薬剤の投与中に生じる drug induced hypersensitivity syndrome (DIHS) に、HHV-6 の再活性化が関与しているとして注目されている。

d. 伝染性紅斑 erythema infectiosum

Human parvovirus B19 (Erythrovirus B19; B19) の感染症で、幼児・学童に好発するが、成人も少なくない。

ウイルスに感染すると、7～9日でウイルス血症が起き、全身倦怠感・関節痛・発熱など感冒症状を呈することがある。感染後14～18日に顔面に蝶形ないし平手打ち様の紅斑が出現する。紅斑は末梢へ拡大し、上腕外側、体幹、大腿へも出現する。はじめは丘疹で出現するが、融合し、さらに網状を呈する。5～7日で消退するが、その後も入浴時、緊張、興奮、泣いたとき、日光曝露時などに再燃することがある。成人例では、前駆症状としての関節痛や筋肉痛などの全身症状、発疹、関節腫脹、関節炎などの症状が、小児に比べ非常に顕著である (図1-10～12)。

e. 伝染性単核(球)症 infectious mononucleosis (IM)

伝染性単核(球)症は、Epstein-Barr ウイルス (EBV) による場合が多いが、cytomegalovirus (CMV) による IM の報告もあり、IM の約10%はCMVによるとされている。

潜伏期は、小児は10～14日だが、成人は比較的長く、3～4週間ともいわれる。発熱、頸部リンパ節腫大を伴う。咽頭・扁桃炎が顕著で、咽頭の発赤、疼痛、偽膜性扁桃炎を呈することもある。皮膚病変は全例にみられるのではなく、約50%の例で、風疹様、麻疹様、猩紅熱様など多彩な症状が出現する。

f. Gianotti 病と Gianotti-Crosti 症候群

Gianotti 病はHBVの初感染であり、Gianotti-Crosti 症候群はHBV以外のウイルスによる疾患とされていたが、その病態において両者の区別はつき